

## コリント人への手紙第二1章8-10節 「壁にぶつかった時」

### 1A アジアでの苦難

1B エペソでの騒動

2B 耐えられないほどの圧迫

3B 死の覚悟

### 2A 復活の神への信頼

1B 自分への絶望

2B 自分でできている間

3B 失敗をお許しになる方

4B 神のみの希望へ

### 3A 死から救い出される神

1B 救い出されてきたパウロ

2B 死とともに、よみがえりを経験するパウロ

3B これからの救いへの確信

## 本文

コリント人への手紙第二1章です。私たちは、新しい手紙、コリント第二に入ります。新しいと言っても、同じコリントにある教会の人々に出した手紙です。午後に1章を一節ずつ見ていきますが、今朝は8-10節に注目します。「8 兄弟たち。アジアで起こった私たちの苦難について、あなたがたに知らずにいてほしくありません。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、生きる望みさえ失うほどでした。9 実際、私たちは死刑の宣告を受けた思いでした。それは、私たちが自分自身に頼らず、死者をよみがえらせてくださる神に頼る者となるためだったのです。10 神は、それほど大きな死の危険から私たちを救い出してくださいました。これからも救い出してくださいます。私たちはこの神に希望を置いています。」

パウロは、宣教の働きにおいて多くの苦しみを受けてきました。その中でも、死にかけたこともありました。ここで書いているアジアで起こった苦難というのは、その一つです。しかし、死にかけたということを通して、死者をよみがえらせてくださる神により頼む信仰が与えられたということです。彼自身、神がイエスを死者の中からよみがえらせてくださったという福音を宣べ伝えている人でしたが、それと、自分自身がその神により頼んでいるというのは、また別なのだとことが分かります。いや、私たちの信仰生活は、実は、その復活の力により頼んでいくことを学び取り続ける、そうして成長するということではないでしょうか。パウロの、死ぬほどの危険から救い出された経験を通して、私たちが、神により頼む知恵について学んでいきたいと思えます。

## 1A アジアでの苦難

### 1B エペソでの騒動

パウロが話し始めている「**アジアで起こった私たちの苦難**」ですが、おそらくは、エペソにおける騒動であると思われます。パウロが、コリント人への第一の手紙を書いたのは、エペソからでした。そして、エペソからマケドニア経由で、コリントに行く予定を立てていました。そのエペソを出ていくことになったのは、大騒動に巻き込まれたことです。

パウロは、第一の手紙で、「五旬節までは、エペソに滞在します。実り多い働きをもたらす門が私のために広く開かれています。反対者も大勢いるからです。」と書いていました(16:8-9)。その、広く開かれた門を、使徒の働き 19 章で読むことができます。パウロが二年間、主のことは宣べ伝えて、なんと、アジアに住む人々がみな、ユダヤ人もギリシア人も主の言葉を聞きました。そして、著しい、神の不思議なわざが行われました。パウロが身に付けていた前掛けを、病人にあてると、なんと病人が治り、悪霊が出て行きました。そして祈禱師が、試しに、パウロの宣べ伝えているイエスの名によって、出ていけと悪霊に対して命じたら、なんと悪霊が、「イエスのことは知っているし、パウロのこともよく知っている。しかし、おまえたちは何者だ。」と言って、悪霊につかれている人が彼らに飛びかかったのです。そして、魔術を行っていた者たちが、その書物を持って来て焼き捨てました。その金額が、銀貨五万枚とのこと。

そこで、エペソの宗教的支柱になっている、アルテミス神殿にも影響を与え始めたのです。これは、世界の七不思議にも数えられる、巨大な神殿で、アルテミスを祭っていて、大理石でできていました。エペソのみならず、周囲の世界からこの神殿でアルテミスを拝むために、はるか遠くから参拝にやって来たものです。そこにまで影響を与えたのです。神殿の銀細工を作る商売をしていた人々が、「あのパウロが、手で作った物は神ではないと言って、エペソだけでなく、アジアのほぼ全域に渡って、大勢の人々を説き伏せ、迷わせたしまった。」と言いました(19:26)。商売あがったりになっていたのです。それで、彼らは、「偉大なるかな、エペソ人のアルテミス」と叫び始めて、町中が大混乱に陥りました。その中で、人々がパウロの同行者を捕らえて、一団となって劇場になだれ込んだのです。

パウロは、その集まった会衆の中に入って行こうとしましたが、弟子たちが無理にそうさせませんでした。またパウロの友人で、アジア州の高官がいました。彼もパウロに使いを送り、劇場に入らないうようにと懇願したのです。この劇場ですが、なんと二万五千人も収容できるという巨大なものです。私もその遺跡に訪問しましたが、イスラエルやヨルダンなど、他の地域でもローマ時代の円形劇場の遺跡を見ましたが、けた外れに大きいものです。この中で、パウロは殺されかけたわけですが、救い出されました。このことを、おそらくはパウロは「**アジアで起こった私たちの苦難**」ということで、語っているのだと思います。

## 2B 耐えられないほどの圧迫

そして、「**私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、生きる望みさえ失うほどでした。**」と言っています。耐えられないほどの圧迫です。自分がどんなにもがいても、抗うことのできない圧迫です。

## 3B 死の覚悟

そこで、「**生きる望みさえ失うほどでした。**」と言っています。ああ、もうこれで死ぬのだと彼は思ったのです。私は、このような経験をしたことがないので分かりません。けれども、この頃、コロナ禍で、コロナに罹った人々で、私の友人や知人でもいますが、本当に死ぬかと思ったと言った人々がかなりいます。

身近な人で、クリスチャンの方で、ここ二年間、コロナに罹っただけでなく、ありとあらゆる病に罹った人がいました。その方の証言を、ここで抜粋します。「この 2 年間、私は試練に次ぐ試練に直面しました。全国に推定 140 人ほどしかいない非常に稀ながん(ステージ4)が見つかり、放射線や胸水を抜く治療などを経て、昨年の初めには余命宣告を受けました。そんな中、骨折し、妹は命に係わる事故に。その後、奇跡的に、このがんとして史上初めて分子標的薬(抗がん剤)が認可になり、がんの縮小が確認されました。喜びもつかの間、突然母が天国へ帰り、その直後にコロナに感染、生死をさまよいました。抗がん剤の副作用が出て甲状腺が機能しなくなり、心臓の手術も受けました。その他にも、肉体的精神的試練が一気に押し寄せてきました。」

しかし、そこから、霊の深みに入っていきます。主を知ること、主のご臨在、また天の望みなど、今までにない境地に達することも、証しておられました。

## 2A 復活の神への信頼

パウロが、証言していることがこのことなのです。9 節、「**実際、私たちは死刑の宣告を受けた思いでした。それは、私たちが自分自身に頼らず、死者をよみがえらせてくださる神に頼る者となるためだったのです。**」

## 1B 自分への絶望

彼は、自分自身に絶望したのです。「**死刑の宣告を受けた思いでした**」と言っています。もう先はないのです。私の家の比較的近いところに、東京拘置所があります。拘置所は、裁判を受けるために抑留しているところですが、それだけでなく、死刑囚が収監されているところでもあります。みなさんもよろしければ、映画「教諭師」を見るのをおすすめします。<sup>1</sup>教諭師とは、死刑囚の話を聞き、キリストの福音を伝え、永遠のいのちの希望へと導く働く人です。囚人に対する、牧師のような存在です。事実、その映画の中では、大杉漣さんの演じる牧師が、話を聞いて、イエス様を伝えよ

---

<sup>1</sup> <http://kyoukaishi-movie.com/>

うとしている様子が出てきます。そこで知るの、死刑囚は更生というような可能性は皆無にさせられていることです。そこにある絶望感は、言語に絶します。その他、死刑を執行した看守の人の証言も聞いたことがあります、あまりにも衝撃的な事なので、そのことは一切、誰にも言わず、墓場まで持って行くのが常なのだそうです。パウロが、そのような思いになったのです。

## 2B 自分でできると思っている間

しかし、パウロは、死後のいのちを信じ、宣べ伝えている人でした。彼は、自分が死ぬ覚悟が出来た時に、生きようとするのをやめた時に、「**私たちが自分自身に頼らず、死者をよみがえらせてくださる神に頼る者**」になったのです。

神には、こういった苦難に大きな目的を持っておられます。生まれつきの盲人のことを思い出します。イエス様が、その男を神殿のところで見て、見つめておられました。弟子たちが、「ヨハ9:2 この人が盲目で生まれたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。両親ですか。」と尋ねました。イエス様は、「9:3 この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。この人に神のわざが現れるためです。」と言われました。生まれつき盲人になったことは、神がなされたことなのです。そして、それは神のわざが現れることでした。彼の盲目は癒されました。それ以上に、彼はイエスを自分の救い主として受け入れ、ひれ伏しました。これが神のわざでありました。このように、苦しみには神の目的があります。ここでは、「**神に頼る**」ようにするという目的です。

## 3B 失敗をお許しになる方

私たちは、どうしても、自分で何とかしていこうとしてしまいます。自分の持っているもので、何とか今の苦境から脱出しようとしてしまいます。そこで神は、そうした試みをことごとく失敗することを、お許しになるのです。思い出すのは、ヤコブです。彼こそが、自分の苦境を、自分の持っているもので、なんとか救い出そうとした人です。彼の伯父である、ラバンの下で働いていました。いろいろだまされて、ヤコブの働いた報酬を結果的に巻き上げていきましたが、彼は、見限って、二人の妻、また子供たちと共に、羊や、奴隷たちも連れて行って、出て行きました。

ところが、故郷に戻る旅の途中で、エサウが四百人と一っしょにやってきていると聞いたのです。ヤコブにとって、エサウはアキレス腱のような存在です。父イサクがエサウを祝福しようとしているところを、父が目が見えないのをよいことに、自分がエサウだと偽って祝福を受け、奪い取ってしまったのです。エサウは、ヤコブを殺すと言っていました。それで逃げたのです。ですから、四百人の者と一緒に来ていると聞いて、彼は恐れに満ちました。そして、いろいろな手はずを整えたのです。宿営を二つに分けました。一つが襲われるならば、もう一つは逃げられると思ったからです。次に、贈り物にする家畜をいくつか作り、一群れずつ、距離をとって贈るように命じました。エサウをそうやって、宥めようとしたのです。

ところが、彼は夜に、ヤボクの渡し場で、ある人と格闘したのです。そして、勝てないのを見て取って、彼はヤコブの腿の関節を外しました。そして、ヤコブは、祝福してくださいと懇願します。そこで、ヤコブの名を、その人はイスラエルの名に変えて、祝福しました。ヤコブはいいました、「創世 32:30 私は顔と顔を合わせて神を見たのに、私のいのちは救われた。」この後は、ヤコブは足をひきずって歩きました。つまり、エサウからは逃れることが出来なかったのです。そして、エサウがやってきます。「エサウは迎えに走って来て、彼を抱きしめ、首に抱きついて口づけし、二人は泣いた。」とあります(33:4)。主が、エサウの手からヤコブを救い出してくださったのです。それは、彼の心を変えることによってです。

#### 4B 神のみの希望へ

このように、神は、私たちが何とかして自分で自分を救い出そうとする試みを失敗させるようにします。そして、私たちがただ、イエス・キリストのみに希望を置くように強く導かれます。何をやってもうまくいかないと思っている時に、私たちは、主のことばとその約束が与えられるんですね。そこで、この方だけに頼る時に、主は救いのみわざを行われるのです。主は、私たちが救い出したいと願われていても、自分で救おうとしている時は、神は、私たちの自由意志を尊重される方ですから、無理強いして救われることはなさいません。私たちがこの方に身をゆだねる時に、神はようやく、救い出すことができるのです。神のみに希望を置くようにされているのです。

先ほどの、珍しいがんにかかって、他にもいろいろな困難に面した方ですが、詩篇 16 篇 8 節にある、ダビデの信仰告白、「私はいつも、主を前にしています」を体験したと言っています。主を前にするというのが、いかに難しいことかを思います。病であれば、お医者さんを前にしてしまいます。お薬を前にしてしまいます。自分で何とかできるものを、自分の前にしてしまうのです。けれども、主ご自身を前にすることができるのか？ここが問われるのですが、試練にあって、自分ではどうすることもできない状況に、主は置かれて、それで主を前にすることができるようになるのです。

#### 3A 死から救い出される神

そして、10 節で、「神は、それほど大きな死の危険から私たちを救い出してくださいました。これからも救い出してくださいます。私たちはこの神に希望を置いています。」と言っています。神が救い出された経験があります。ゆえに、今も救い出してくださいし、これからも救われるという自身、いや確信が増し加わります。

#### 1B 救い出されてきたパウロ

パウロは、このアジアでの困難だけでなく、何度となく死の危険が羅救い出されました。ダマスコの途上でイエス様に会って、回心して、ダマスコに到着したらイエス様を伝えました。ユダヤ人は彼を殺そうとしましたが、友人たちが手伝って、彼を城壁伝いに釣り降ろして、何とか逃げる事が出来ました。そして、リステラでは、石打ちにされました。彼らはパウロが死んだものだと思って、

町から引きずり出しましたが、弟子たちが彼を取り囲んでいると、彼は立ち上がって、町に戻って行ったのです。そして、エペソでの騒動があり、エルサレムにおいて、ユダヤ人たちがパウロを殺そうとして、体が引き裂かれそうになったところで、ローマの千人隊長が引き出しました。そして、囚人としてローマに連行された時に、船の遭難で、みな死にそうになりました。そこでも、かろうじて死から救い出されました。

### 2B 死とともに、よみがえりを経験するパウロ

このような死の危険があったので、第二の手紙では、このような弱い、土の器に、キリストの栄光が輝くのだということを言っています。そして、こう言います。「4:8-10 私たちは四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方に暮れますが、行き詰まることはありません。9 迫害されますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。10 私たちは、いつもイエスの死を身に帯びています。それはまた、イエスのいのちが私たちの身に現れるためです。」死に面しているから、そこで、イエスのよみがえりのいのちが現れる、復活の神のお姿が現れるということなのです。

### 3B これからの救いへの確信

このような経験をしているからこそ、将来に対しても、主が救い出してくださるのだという確信が与えられます。これが、信仰による経験ということです。これまで主が良くしてくださったのだから、これからも、そうしてくださるだろうと信頼が増すのです。

アブラハムの信仰の歩みを思い出します。彼は、初め、カナンの地にて飢饉が起こった時に、エジプトに下りました。そのように、主が備えてくださるところへの信頼が薄かったのです。しかし、そこでロトもいっしょだったのが、ついに、彼は、エジプトのように豊かだったソドムのところに移り住んだのです。かろうじて神の火の裁きから救われましたが、そして、エジプトでサラが得た女奴隷ハガイによって、アブラハムはイシュマエルを得ました。ところが、イシュマエルはイサクをからかうような兄であり、主が彼をハガイと共に追い出すように命じられたのです。アブラハムは、神が良くして下さり、イサクという約束の子を与えてくださったのを経験しました。

それで、イサクを全焼のいけにえとして献げなさいと命じられた時に、アブラハムは疑うこともなく、粛々と準備をしていったのです。そして、御使いが止めるところまで、イサクに刀を振り下ろして、主の命じることを行おうとしたのです。ヘブル 11 章には、アブラハムはイサクを屠っても、取り戻すことができるという信仰を持っていました。つまり、イサクをよみがえらせてくださると信じていたので、臆することなく準備できたのです。こうやって、アブラハムの信仰は成長しました。それは、何度となく、主がアブラハムを、彼の行いに関わらず、祝福を経験させたからです。それによって、アブラハムは試練の時に、神は良くしてくださると確信することができるようになりました。

このようにして、神は、ご自分のみの希望を我々が置くようにされていきます。苦しみは、希望に至るのです。「ロマ 5:3-4 それだけではなく、苦難さえも喜んでいきます。それは、苦難が忍耐を生み出し、4 忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと、私たちは知っているからです。」